

2022年12月18日（日）／説教者：國分美生

説教：「夜明け前」

聖書：ルカによる福音書2：1～7

聖書の記述からイエスのお誕生の場面は寒くて暗い冬の真夜中がイメージされます。それは実は実際とは違いますが、しかしその時代の人々の心の内を表すものとしてふさわしいように思います。

ルカ福音書はイエスの誕生を、皇帝アウグストゥスの命令による、納税のための住民登録の最中の出来事として描きます。納税する側がわざわざ大変な思いをしなければならないのは、昔も今も変わらない図式です。マリアとヨセフは何日もかけて苦労して出身地まで歩かなければなりませんでしたが、同じような苦労を実にたくさんの人たちさせられたことが「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」という記述からわかります。

当時ガラヤはローマの支配下であり、様々な形で市民の暮らしが脅かされていました。重い税金、市民に対するローマ兵の暴力、とりわけ女性たちの身の危険…人々は何度も何度もローマに対し抵抗運動をおこし立ち上がり、そのたびにつぶされ、報復を受けていたそんな時代でした。それは命と生活のため、なにより自分たちのアイデンティティを取り戻すための戦いでした。ローマの暴力に対し武器をもって抵抗し、武器を手にとって戦うか、それとも諦めて手を束ねてされるがままになっているかの選択を迫られ、人々は分断されていた時代であったでしょう。そのような分断というのは、いつの時代にもあり、そして今私たちも直面しているものです。そのような中でキリストのお誕生は、これまでとは違う世界の到来、新しい世界の夜明けを私たちに予感させるがゆえに、喜ばしいものです。

クリスマスはなぜ私たちにとって希望なのか、改めて深く考えさせられます。かつて、救い主の誕生の良き知らせを聞いた人々と同じように、私たちの内にも希望がこだまします。キリストの福音が私たちの間にある分断の溝を埋め、食べられない人が食べられるようになり、傷ついた人が癒される。報われない人が報われる。そして富と権力を持つ人たちが、持たない人たちを思いやれるようになる。イエス・キリストの誕生日は、その日に向かっての夜明けの時です。

イエス・キリストの福音を胸に刻む時、みことばを携えて団結・連帯する時、私たちはこの夜明け前を絶望することなく、立ち続けていくことができます。

今がどんなに暗くても、世界が希望をもって、クリスマスを迎えることが出来るようにわたしたちは繋がり、祈りましょう。（國分美生）